

教養科目			農学部				2025年度 カリキュラムマップ													
教養科目のDP(ディプロマ・ポリシー)																				
自ら学ぶ力	DP1	知識・技能	豊かな教養と確かな専門知識・技能を身につけている。																	
	DP2	情報の活用	目的に応じて情報を収集し、それを活用できる力を身につけている。																	
	DP3	主体的な学びと論理的な思考	科学的、論理的な思考力と創造力を持ち、主体性をもって自ら学び続けることができる。																	
生きぬく力	DP4	コミュニケーション・表現力	多様性を尊重し、共に生きるためのコミュニケーション能力と表現力を身につけている。																	
	DP5	グローバルな視野と地域貢献活動	グローバルな視野と国際感覚を持って、地域社会で積極的に活動できる。																	
	DP6	課題解決力	困難に立ち向かい、知識を活かして「知恵」とし、課題を解決して社会を生きぬく力を身につけている。																	
働ける力	DP7	自己効力感	知的好奇心を持ち、自ら学ぶ姿勢を身につけ、社会に対して自身の能力を発揮したいと意欲に溢れることで大学生活の中で自信をつけることができ、自らの可能性を信じてチャレンジできる。																	
◎:科目の到達目標が該当のDPに直結する科目(100%) ○:科目の到達目標が該当のDPIに関わる科目(70%) △:科目の到達目標が該当のDPIに少し関わる科目(30%)																				
授業科目 ◆は必修			単位数	配当 年次	履修期	主要授業科目	授業概要(素案)							DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7
人間力育成科目	◆	きびこく学	1	1	春	○	順正学園及び吉備国際大学、またキャンパスのある地域の歴史・文化・社会の特色や課題について多角的に学び、吉備国際大学の学生としての知的基盤を培う科目である。この科目は、吉備国際大学の教育目標である「地域創成に実践的に役立つ人材を養成する」教育への序論として位置づけられる。	◎	△	◎	△	◎	◎	◎						
	◆	SDGs概論	1	1	春	○	2030年までの国際目標である「持続可能な開発目標SDGs」について、その背景や目的、実際にどのような取り組みが行われているかを学ぶ。そして、学生自らがその実現に向け、何ができるか、また何をしなければならないかを考え、実行しようとする能力を身につける。	△	○	◎		◎	◎							
	◆	グローバルスタディーズ入門	2	1	春 または秋	○	社会科学分野の基本概念を学ぶことを通じて、基本的な世界の常識を学びつつ、日本人としてのアイデンティティを確立することを目指す。具体的なイシューを題材とし履修者で議論し、問題解決型学習の実践を行なう。	○		◎		◎	◎							
	◆	課題解決演習	2	1	秋	○	これまでに学んだ各地域の現状・課題、SDGsに関する目標・課題について、それぞれ解決策を模索することで、社会に積極的に貢献しようとする心や姿勢を養うことを到達目標とする。具体的には、グループごとに課題とするテーマを設定し、テーマに沿った情報を調べ、どのような手法であれば課題が解決できるかを検討する。以上の能動的学習経験により、課題解決のために必要な一連のプロセスを修得する。			△	△	○	○	◎	◎					
キャリア教育科目	◆	キャリアデザインⅠ	2	1	春	○	この科目では、社会的自立と職業的自立にむけて、自分の生き方・働き方を計画(キャリアデザイン)し、実行できる人間力と社会人意識の基礎を身につけることを目標に、社会が求める人間像(自主性、責任感、教養、分別、コミュニケーション力)について考え、自分自身を知り目標をもって実行していく力を習得する。 具体的には、合同授業で、社会人としてのキャリア形成に必要な知識等を理解し、学科単位の授業では、各学科が目指す人材像について深く学び、資格取得や卒業後の進路選択に向け、社会人となるための基礎を築く。キャリアポートフォリオを活用し、目標設定と振り返りにより卒業時を見据えた効果的な授業を行う。				◎	○		△	◎					
	◆	キャリアデザインⅡ	1	2	春	○	自身の長期的なライフプランを考え、進路選択に向けて必要な情報収集をするとともに、それを活用し職業・企業理解に必要なスキルを身につける。同時に、2年次の目標を設定し、活動記録の入力、振り返りなどキャリアポートフォリオを作成するとともに、大学生として必要なマナーや、就職活動や実習に向けての心構えなどあわせて身につける。			△	◎	○		△	◎					
	◆	キャリア実践Ⅰ	1	3	春	○	社会人として必要な自己表現力などとともに、就職活動に必要なスキルを身につけ、自身の「キャリアプラン」を実現するための方法を学ぶ。具体的には、就職先となる企業や施設の研究、また就職活動の手法(エントリーシート・履歴書、面接対策等)を就職活動の流れに沿って実践的に学ぶ。また、社会や就職活動で必要な会話術、面接、グループディスカッションの場面での自己表現力の育成も合わせて行う。実際に企業見学やインターンシップにも参加する。			○	○	○		○	◎					
		キャリア実践Ⅱ	1	3	春		「キャリア実践Ⅰ」に引き続き、就職活動に必要なスキルや能力の向上を図る。就職活動に必要なエントリーシート・履歴書の書き方、面接対策、試験に多く用いられるSPI対策、キャリアポートフォリオの就活への活用など、就職活動に必要な就職活動に実践的に役立つ内容を学び、実行する。			○	○	○		○	◎					

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	授業概要(素案)	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7
数 理 ・ 情 報 活 用 科 目	◆ 情報活用	2	1	春	○	高校までに習得したコンピュータリテラシーをもとに、入学してから半期 の間で、大学生に必要とされる基本的なコンピュータスキルを身につける ことを到達目標とする。 コンピュータ基本操作および基礎的アプリケーションソフトの利用をおこ なえるように学習し、大学でITを活用した効率的な学習を行うための基 礎知識を習得する。	○	◎	△				
	数理・データサイエンス・AI 基礎	2	1	秋		今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常の生 活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的素養を身につける。基 礎編は、数理・データサイエンス・AIリテラシーレベルモデルカリキュラム で示されている、「導入(社会におけるデータ・AI利活用)」「基礎(データ リテラシー)」「心得(データ・AI利活用における留意事項)」で構成され る。	○	◎	△		○		
	数理・データサイエンス・AI 応用	2	2	春		今後のデジタル社会において、数理・データサイエンス・AIを日常の生 活、仕事等の場で使いこなすことができる基礎的素養を身につける。応 用編は、数理・データサイエンス・AIリテラシーレベルモデルカリキュラム で示されている、「基礎(データ・AI利活用)」「選択(オプション)」で構成さ れる。 数理・データサイエンス・AI基礎の単位取得が履修の前提である。	○	◎	△		○		
言 語 教 育 科 目 外 国 語	◆ 英語基礎Ⅰ	2	1	春	○	高校までに学んだ基本的な重要文法、単語を復習し、英語によるコミュ ニケーションが図れるようになることを目指す。 「アクティブ英語Ⅰ」で学ぶ会話(コミュニケーション英語)について、文法 や単語、用法をこの科目において詳しく学び、英語力の定着を図る。	◎		◎				
	◆ 英語基礎Ⅱ	2	1	秋	○	「英語基礎Ⅰ」に引き続き、高校までに学んだ基本的な重要文法、単語 を復習し、英語によるコミュニケーションが図れるようになることを目指 す。 「アクティブ英語Ⅱ」で学ぶ会話(コミュニケーション英語)について、文法 や単語、用法をこの科目において詳しく学び、英語力の定着を図る。	◎		◎				
	◆ アクティブ英語Ⅰ	2	1	春	○	ネイティブ教員による英会話を中心とした授業で、学生が英語でのコミュ ニケーションの楽しさや学ぶことの意義を感じ、積極的に英語で話そうと する姿勢や基本的な英会話能力の育成を目指す。授業で取り扱った会 話については、「英語基礎Ⅰ」において、文法や単語、用法を詳しく学 び、英語力の定着を図る。	◎		◎	◎			
	アクティブ英語Ⅱ	2	1	秋		「アクティブ英語Ⅰ」に引き続き、ネイティブ教員による英会話を中心とし た授業で、学生が英語でのコミュニケーションの楽しさや学ぶことの意 義を感じ、積極的に英語で話そうとする姿勢や基本的な英会話能力の 育成を目指す。授業で取り扱った会話については、「英語基礎Ⅱ」にお いて、文法や単語、用法を詳しく学び、英語力の定着を図る。	◎		◎	◎			
	レベルアップ英語Ⅰ	2	2	春		海外留学や英語をさらに学び将来社会で役立てたいと考える学生など を対象に、英語力のレベルアップ、留学向けの支援などを目指す科目 である。TOEIC対策なども行い、実践的に役立つ英語力を育成する。			◎	◎	◎		
	レベルアップ英語Ⅱ	2	2	秋		「レベルアップ英語Ⅰ」に引き続き、海外留学や英語をさらに学び将来社 会で役立てたいと考える学生などを対象に、英語力のレベルアップ、留 学向けの支援などを目指す科目である。TOEIC対策なども行い、実 践的に役立つ英語力を育成する。			◎	◎	◎		
	中国語と中国文化Ⅰ	2	1	春		中国語の基礎的な文法や発音、日常的によく使われる例文などを学 び、中国語による初歩的なコミュニケーション技能の修得を目標とする。 また中国語を通して、中国の社会、文化、歴史、慣習などの背景を学 び、日本と異なる地域の文化や社会に対する理解を深める。	◎		◎		◎		
	中国語と中国文化Ⅱ	2	1	秋		「中国語Ⅰ」に引き続き、中国語の基礎的な文法や発音、日常的によく 使われる例文などを学び、中国語による初歩的なコミュニケーション技 能の修得を目標とする。また中国語を通して、中国の社会、文化、歴 史、慣習などの背景を学び、日本と異なる地域の文化や社会に対する 理解を深める。	◎		◎		◎		

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	授業概要(素案)	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7
外国語	フランス語とフランス文化	I	2	1	春	フランス語の基礎的な文法や発音、日常的によく使われる例文などを学び、フランス語による初歩的なコミュニケーション技能の修得を目標とする。またフランス語を通して、フランスの社会、文化、歴史、慣習などの背景を学び、日本と異なる地域の文化や社会に対する理解を深める。	◎		◎		◎		
		II	2	1	秋	「フランス語 I」に引き続き、フランス語の基礎的な文法や発音、日常的によく使われる例文などを学び、フランス語による初歩的なコミュニケーション技能の修得を目標とする。またフランス語を通して、フランスの社会、文化、歴史、慣習などの背景を学び、日本と異なる地域の文化や社会に対する理解を深める。	◎		◎		◎		
		ドイツ語とドイツ文化 I	2	1	春	ドイツ語の基礎的な文法や発音、日常的によく使われる例文などを学び、ドイツ語による初歩的なコミュニケーション技能の修得を目標とする。またドイツ語を通して、ドイツの社会、文化、歴史、慣習などの背景を学び、日本と異なる地域の文化や社会に対する理解を深める。	◎		◎		◎		
		ドイツ語とドイツ文化 II	2	1	秋	「ドイツ語 I」に引き続き、ドイツ語の基礎的な文法や発音、日常的によく使われる例文などを学び、ドイツ語による初歩的なコミュニケーション技能の修得を目標とする。またドイツ語を通して、ドイツの社会、文化、歴史、慣習などの背景を学び、日本と異なる地域の文化や社会に対する理解を深める。	◎		◎		◎		
	言語教育科目	◇ 日本語 I A(文法)	2	1	春	○	日本語能力試験N2合格を目指し、文法・文字・語彙を中心に学ぶ。N2レベルの言語知識(文字・語彙・文法など)の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		
		◇ 日本語 I A(読解)	2	1	春	○	日本語能力試験N2合格を目指し、読解を中心に学ぶ。N2レベルの読解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		
		◇ 日本語 I A(聴解)	2	1	春	○	日本語能力試験N2合格を目指し、聴解を中心に学ぶ。N2レベルの聴解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		
		◇ 日本語 I B(文法)	2	1	秋	○	日本語能力試験N2合格を目指し、文法・文字・語彙を中心に学ぶ。N2レベルの言語知識(文字・語彙・文法など)の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		
		◇ 日本語 I B(読解)	2	1	秋	○	日本語能力試験N2合格を目指し、読解を中心に学ぶ。N2レベルの読解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		
		◇ 日本語 I B(聴解)	2	1	秋	○	日本語能力試験N2合格を目指し、聴解を中心に学ぶ。N2レベルの聴解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		
		* 日本語 II A(文法)	2	2	春		日本語能力試験N1合格を目指し、文法・文字・語彙を中心に学ぶ。N1レベルの言語知識(文字・語彙・文法など)の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中上級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎		

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	授業概要(素案)	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7
言語教育科目	日本語（留学生専用科目）												
	* 日本語ⅡA(読解)	2	2	春		日本語能力試験N1合格を目指し、読解を中心に学ぶ。N1レベルの読解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中上級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎			
	* 日本語ⅡA(聴解)	2	2	春		日本語能力試験N1合格を目指し、聴解を中心に学ぶ。N1レベルの聴解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中上級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎			
	* 日本語ⅡB(文法)	2	2	秋		日本語能力試験N1合格を目指し、文法・文字・語彙を中心に学ぶ。N1レベルの言語知識(文字・語彙・文法など)の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中上級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎			
	* 日本語ⅡB(読解)	2	2	秋		日本語能力試験N1合格を目指し、読解を中心に学ぶ。N1レベルの読解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中上級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎			
	* 日本語ⅡB(聴解)	2	2	秋		日本語能力試験N1合格を目指し、聴解を中心に学ぶ。N1レベルの聴解の出題傾向を知り、練習問題を解きながら、実践力を養う。また中上級レベルの日本語表現を学び、事物・事象を説明したり、自分の意見を述べたりできるコミュニケーション力を身につける。	◎	△	◎	◎			
基礎教育科目	社会の理解												
	日本国憲法	2	1	春 または 秋		日本国憲法における基本的論点を、判例やニュースを織り交ぜながらできるだけ平易に解説すると同時に、日本国憲法の将来を自分で考えるために必要と思われる情報を提供する。「人権」について理解を深める。 主権者として必要とされる日本国憲法の知識を身につけ、さらに憲法改正につき論理的に自己の考えを述べることを目指す。「人権」について正しく理解し、快適な社会づくりに貢献できることを目指す。	◎		◎	○			
	経済学	2	1	春 または 秋		私たちの暮らしの中の経済の仕組みや経済活動について学び、大学生として必要とされる経済学の基礎を身につける。 経済学のすべての分野に共通する理論分野であるミクロ経済学では、個々の消費者の行動や個々の消費者の行動や企業の行動に関する分析をもとに、価格メカニズムについて分析していく。具体的には経済学の考え方、需要と供給、価格弾力性、市場の構造と価格分析、公共財と共有資源問題などに関する基礎的知識を修得する。なお、豊富な事例を取り上げ、現実経済問題に関する理解を深める。	◎		◎				
	社会学	2	1	春 または 秋		社会学は我々にとって身近な「社会」を扱う学問である。そのため、本講義では、「社会学を理解する、覚える」のではなく、「社会学を応用する力」を身につけることまでを目標とする。まず最初に基礎的な社会学の理論、社会学的な分析の方法を身につけた上で、人口、家族、地域、エスニシティ、環境、医療、福祉、産業、労働など、様々なテーマを挙げ、各事例に対して、社会学的なアプローチから考察を加える。	◎	△	◎	△	△		
	人間形成												
	哲学	2	1	春 または 秋		哲学の基本的な知識、哲学思想の流れをつかみ、代表的な思想家の考え方とその背景を学ぶ。哲学とかかわりの深い倫理学・宗教学についての基礎も合わせて学ぶ。 古代ギリシャにおける哲学の誕生や初期の展開、プラトンやアリストテレスを通じての哲学の確立、ヘレニズム期の哲学、古代末期の哲学とキリスト教といったことを、ギリシャ世界の拡大と変容、ヘレニズム世界の成立、ローマによる政治的統合といった時代背景の中で理解する。また西欧世界の成立と発展といった文脈の中で、自由学芸、哲学、神学の関係や、諸科学の成立と哲学の変容を理解する。	◎		◎	△			
	心理学	2	1	春 または 秋		心理学とはどんな学問かを知ることがテーマである。心理学は心の働きについて科学的に研究していく学問である。人が生活している環境からいかに情報を取り入れ、蓄積し、利用するのか、あるいは、いかに人間関係のなかで適応的に生きているのかなどについての学びを通して、心理学のおもしろさに触れ、心理学の基礎的な考え方を理解する。	◎		◎	△			△
	多様性の理解	2	1	春 または 秋		異文化をはじめ、人種や宗教、性別やLGBTなど、現代社会における多様性について、それぞれの現状と課題を理解し、ダイバーシティ実現のために何が必要か、また自らが何かできるかを考え、積極的に行動しようとする態度を育成する。(人権教育を含む)				◎	◎		

授業科目 ◆は必修						単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	授業概要(素案)					DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7
基礎 教育 科目	人間 形成	文章力の基礎	2	1	春 または 秋		大学生活では、高度な授業内容を理解し、専門書を読み、発表資料・レポート作成を行い、それを発表する能力が必要となる。本講義では、そのために必要な日本語力の養成をめざし、学生が、日本語の円滑な運用に必要な重点項目を毎回順番に学修することにより、確実な日本語力を身につけることを到達目標とする。	◎		◎	○										
		生涯スポーツ論	2	1	春 または 秋		少子高齢社会を生きる現代人にとって「健康」がもつ意味が多様化していることを踏まえ、「スポーツ」が果たす役割に着目し、「健康づくり」「健康増進」の視点から論ずる。これらを踏まえ、各年代に応じたスポーツのあり方、また生涯を通したスポーツへの親しみ方を理解した上で、生涯にわたって豊かな生活を送るための取り組みについて講義する。	◎		○	○										
		生涯スポーツ実習	1	1	春 または 秋		様々なスポーツ種目を通して、スポーツの楽しさと健康増進の効果を理解し、生涯にわたりスポーツに親しみ、健康的な生活を送ろうとする態度と知識を習得する。	△			◎										
	自然 科学	数的理解	2	1	春 または 秋		迅速かつ的確な数的理解力の育成をテーマとして、課題に含まれる諸要素と関係性を捉え、適宜情報収集しながら課題解決の方針を見つけ、結果を導き出す力を身につける。	◎	◎	◎					△						
		化学	2	1	春 または 秋		基礎的な化学の知識の確認・修得に重点におき、身のまわりの現象や物質などを取り上げ授業を行う。将来の種々職業や生活に役立つ化学的な知識を修得する。	◎		◎											
		生物学	2	1	春 または 秋		生物の基礎ともいえる生態、細胞や遺伝などに加え、人の健康に深く関係する生活習慣病などの幅広い知識を習得し、生物現象を広く正確に把握できる。 地域における森や植物、河川や水生生物の学習、更に海と沿岸生物、魚類生態などの諸分野の幅広い生物生態学の知識を学ぶ。加えて生物学と医学、細胞・遺伝などの基礎生物学を学び、それらをもとに老いと生物学、ヒトの一生と健康な生活などの基礎医学の諸分野、また再生医療や環境問題などこれからの生物学に関する広範囲の知識を習得する。	◎		◎		△									
		環境科学	2	1	春 または 秋		現在、地球上では近未来を危ぶむ種々の重大な問題(地球温暖化、オゾン層の破壊、環境ホルモン等)が生じている。我々にとって種々のレベルでの環境状況を正しく把握し、また将来生じると予想される問題を予見し、先見の問題意識をもって対応をすることが重要である。本講義ではこれらに関連する問題をDVD映像などにより理解し、その対策について考え、地球環境を科学的に理解し論理的に思考できるようになることをテーマとする。	◎		○		△	△								

◎	34	4	38	18	12	4	6
○	3	2	2	7	1	0	0
△	2	16	4	4	3	4	1
合計	39	22	44	29	16	8	7

学部名	農学部	学科名	海洋水産生物学科	2025年度 カリキュラムマップ
-----	-----	-----	----------	------------------

海洋水産生物学科のDP(ディプロマ・ポリシー)

海洋水産生物学科では、水産増殖、環境保全、地域振興及び食品ビジネスに関する4つの分野における教育課程を修め、学則に定める卒業に必要な単位を修得し、以下の8つの力を身につけた人に対して学位を授与します。

自ら学ぶ力	DP1 知識・技能	水産業を基盤とした地域創成に求められる水産増殖・環境保全分野及び地域振興・食品ビジネス分野の基礎的な知識および技術を身に付けている。
	DP2 情報の活用	水産業に関する膨大な情報の中から重要な情報を抽出し、正しく解析する分析力を身に付け、解析結果を有効に活用できる。
	DP3 主体的な学びと論理的な思考	自らが問題意識を持ち、自主的に学び、科学的な知識と論理的な思考により、自分自身を成長させようと意欲を持ち続けることができる。
生きぬく力	DP4 コミュニケーション・表現力	聞く力、話す力を共に身につけ、自分の意見をしっかりと伝えることができる。これによってさまざまな人とのコミュニケーションを図ることができる。
	DP5 グローバルな視野と地域貢献活動	国際社会における視点から地域を捉え、個性あふれる、生き生きとした地域を創造するための意欲と活動能力を身に付けている。
	DP6 課題解決力	社会における諸課題を掘り起こし、これを解決する方法を見出して提案するとともに、自らが社会を生きぬく力を身に付けている。
信じられる力	DP7 自己効力感	失敗や成功の原因を明らかにできる力をもち、何らかの課題に直面したときにも、自己の知識、技術、洞察力、実行力を信じて課題解決に立ち向かう力を身に付けている。
	DP8 SDGsの達成を目指して	環境保護、貧困からの脱却などSDGsの掲げる達成目標を理解し、水産増殖・環境保全分野及び地域振興・食品ビジネス分野でどのような貢献ができるのか考え、行動する。

◎:科目の到達目標が該当のDPに直結する科目(100%) ○:科目の到達目標が該当のDPに関わる科目(70%) △:科目の到達目標が該当のDPに少し関わる科目(30%)

授業科目 ◆は必修		単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標 (授業内容を含めわかりやすく記入)	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
専門基礎科目	◆ 南あわじ農業学	2	1	春	○	南あわじ地域は、温暖な気象条件や排水の良い土壌条件などに恵まれた農業・漁業に適した地域であり、主要品目である「たまねぎ・レタス」、「酪農・肉用牛」、「海苔・わかめ」等の生産の歴史や技術の変遷、生産技術の特徴や発展経過、担い手の育成対策など、南あわじ農業全体(生産・流通・加工)の現状およびそれを育ててきた背景などを学ぶ。		○			◎	△		
	◆ 海洋水産生物学概論	2	1	春	○	本講義では海洋水産生物学科で何を学ぶかを要約して講述する。海洋水産生物の持つ魅力、その産業適用への可能性、それを保全し利用することを通しての地域活性化、そして研究の実例の紹介などをオムニバス形式で紹介し、受講する学生が、海洋水産生物の応用価値を知ることで、その後の専門授業での教育効果を高めるための多角的視点を養う。	◎	○	○					○
	◆ 基礎演習Ⅰ	1	1	春	○	基礎演習Ⅰでは、まず大学生活に溶け込み、今後の学習を円滑に進めていくための支援として、大学キャンパスのある高梁市、南あわじ市の文化・産業などについて体験的に学びながら、仲間・人間関係の構築を目指す。到達目標は、高梁市、南あわじ市の文化・産業についての基礎知識を得るとともに、学内の人間関係を築くことである。		○		○		◎		△
	◆ 基礎演習Ⅱ	1	1	秋	○	基礎演習Ⅱでは、大学・学科への所属意識を高め、人間関係を豊かにするとともに、学修基礎力を涵養することを目指す。到達目標は、吉備国際大学生としてのアイデンティティの形成と仲間づくり、大学における居場所づくりの進展、そして、情報を収集・整理し、それをわかりやすく発表できることである。		○		○		◎		△
	◆ 基礎演習Ⅲ	1	2	春	○	水産生物という専門分野における総合的な課題探究能力・主体的判断能力の育成を目指して、教養教育と専門教育の有機的連携を考察する。教員から与えられる専門情報に関して、受容から獲得へ、学修から研究へと、理解を深め、専門的知識を演習グループの共通認識へと高めていく。		○		○		◎		△
	◆ 基礎演習Ⅳ	1	2	秋	○	海岸等の周囲の状況観察を体験し、そして、資料や文献を検索すると同時に連動させて、情報の専門的解釈および記録の方法を学修する。学習内容を、グループ研究の形で共同研究発表や討議などを通して、演習グループの共有財産に高める。知識に対する自己自身の姿勢を社会との関連で理解し、将来的自己の専門家としての主体性(モチベーションとアイデンティティ)と活動内容を考察する。		○		○		◎		◎
	遺伝学	2	1	秋	○	生命現象の多くは、遺伝現象と密接に関係している。したがって、生命科学を学ぶ上で必要な遺伝現象を深く理解することが重要である。講義では、細胞周期、体細胞分裂、メンデル性遺伝、遺伝形質、細胞遺伝、および集団遺伝について解説し、遺伝現象の詳細および研究方法などについて理解を深める。	◎	○	○					
	分子生物学	2	2	春	○	クローン技術とは？遺伝子組換え作物とは？最近のバイオテクノロジー分野の進歩は目覚ましく、実験室での基礎研究から、各産業分野での製品開発まで幅広く展開されている。農業分野においても、品種改良や選抜育種などに利用され、次世代農業へのアプローチが期待されている。分子生物学とは生命現象を分子のレベルで説明する学問であり、バイオテクノロジーの大躍進も、分子生物学の成果なしでは起こり得なかった。講義では、遺伝子とは何か、遺伝子はどのように複製されるのか、遺伝子の情報はどのように伝達されるのか、またその情報から細胞は何を作り出すのか、等の分子生物学の基礎的事項を分かりやすく解説する。	◎	○						○

授業科目 ◆は必修		単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
専門基礎科目	ゲノム情報学	2	1	秋	○	ゲノムとは、生物を作り出し、その生物が生命活動を営むために必要最小限の全遺伝情報である。ゲノムや遺伝子を研究する生命科学分野をゲノム科学という。一見、農業とゲノム科学は無関係のように思われる。しかし、私たちの身の回りには様々な品種の違いは、ゲノムに書き込まれた遺伝情報の違いに起因する。品種に適した栽培法の開発や新たな特性をもつ新品種の育成など、これらの農業においては、「生命の設計図」であるゲノムを理解することが非常に重要である。本講義では、ゲノムがどのようにして生物を作り出すのかを中心に、ゲノム科学の重要性とおもしろさについて解説する。	◎						○	
	植物生理学	2	1	春	○	本講義で取り上げるのは植物生理学の分野の中でも、植物の栽培に関連深い内容である。すなわち、光合成と呼吸、植物栄養元素の吸収と代謝、環境ストレス（高温・低温、乾燥・塩分および酸性土壌）に対する植物の反応、二次代謝産物の役割を主に取り上げる。関連分野である遺伝学・分子生物学、植物生態学についても必要に応じて説明する。	◎		△					
	生物の進化と多様性	2	2	春	○	地球と生命の誕生、多様な生物の進化および地球生命共同体を構成する生物種について理解し、持続可能な地球環境生命体を維持することの必要性と、食料ならびに環境資源としての植物の重要性を学ぶことを目標とする。地球の誕生後、原始生命体の誕生に至る進化、さらに細胞の共生等を経て多種多様な生物種へと進化した過程と生物分類について解説する。また、食料ならびに地球環境資源として不可欠な植物については、光合成能力の獲得や陸上生活への適応、生殖様式の進化などについて講義する。	◎	○	○		○			
	◆ 海洋水産生物ビジネスの技術と倫理	2	1	秋	○	レジャー、漁業、食品加工など、水圏環境、海洋生物や水産資源を利用するビジネスにおいては、安全性、不当表示、乱獲による生物資源の減少、海洋プラスチックゴミ等の海洋汚染など、1次産業や食品業界を中心として様々な問題がとりざたされており、それらには、生産者、技術者、事業者の倫理的な姿勢が大きく関係している。この授業では、様々なアクアビジネスにおける技術開発事例から、現場での技術開発の実例を通して、その技術・倫理的問題点やその解決方法、さらに、それぞれのビジネスのシーンでの水圏環境や生物種を保全するために必要な知識を習得することを通して、生産者、技術者、事業者として必要な倫理感を養うことを目的とする。			◎		○	○		○
	海洋水産生物ビジネスの経済と流通	2	1	秋	○	レジャー、漁業、食品加工など、水圏環境、海洋生物や水産資源を利用するビジネスという経済活動のなかにおける流通活動・商業活動の意味や役割について理解し、その仕組みや制度について知識を習得することを目的とする。レジャー産業が6次産業化に関連するスモールビジネスの実態や、今後のグローバル化やネット全盛の流れのなかでの消費や流通活動のあり方について解説する。また、水産物の流通に関わる基本的な考え方や基本用語について解説し、様々な小売業のかたちとその活動内容について、地域の事例を交えながら紹介する。				○		○		
	生物化学	2	2	春	○	生物化学(Biochemistry)は生体分子を取り出し、その構造と機能を調べ、それら生体分子間の相互作用の解析を通して、生命現象を説明しようとする学問である。本講義では、生体を構成する炭水化物、脂質、アミノ酸とタンパク質、核酸とその成分、酵素に焦点を当て、それらの基本的な構造と機能について講義する。	◎		△					
	有機化学	2	2	秋	○	有機化学における化学結合と構造、化学反応、および立体化学などについて入門的に解説する。講義前半では、基本的な化合物（メタン、シクロヘキサン、エチレン、アセチレン、ベンゼンなど）の化学結合と構造、反応性および立体化学などについて解説し、より複雑な化合物系への応用ができるようにする。講義後半では、分子の世界のなかで、生体機能分子を取り上げ、有用天然物の化学、血液型と糖化学、物の見える仕組み-視覚と分子、味覚、嗅覚と分子、薬の功罪-サリドマイドの復活、などについて概説する。	◎		△					
	食の安全学	2	1	春	○	われわれの周りには食品の安全に関する諸問題が数多く存在し、われわれの健康を危うくする事態にまで至る場合もある。したがって、どのようにして食品の安全の問題が生じるのか、また、その対策法を学修することは、食品の製造・販売に携わる側のみでなく、消費者の立場からも重要である。そこで、本講義ではまず食品の安心・安全に関係した衛生管理の基本を解説する。さらに、食品の偽装問題、放射能汚染に対する風評被害などの事例を紹介しつつ、食品製造・販売に対する技術者倫理の重要性とともに、消費者への科学知識の正確な情報伝達的重要性を解説する。また、科学倫理、科学コミュニケーション、リスク管理を学修し、これらを通して、食品の研究開発や、食品流通に携わったときに生ずる諸問題に対処できる能力を養う。	◎	△					○	
	◆ 生物学実験	1	2	春	○	食資源生物の生産維持管理にかかわる植物および微生物についての基礎知識および実験技術を取得するため主としての実習を行う。	○		◎	○		○	○	
	化学実験	1	2	秋	○	化学物質の扱い方、火器や化学分析機器の安全な扱い方、有害物質の廃棄方法などを詳細に口述し、事故の危険から自分と周囲の人たちを護る方法を説明する。そして、化学実験の手順、分析方法の手順、分析結果の計算方法などを詳細に説明し、下記に示した順に実験に着手し、水分量、脂質量、タンパク質量、およびミネラルである灰分量の重量法による定量、そして、炭水化物の発色法での分光学的定量を行う。また、行った実験の手順と結果をまとめた的確に報告する分析報告書の書き方を説明する。	○		◎	○		○	○	

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標 (授業内容を含めわかりやすく記入)	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
水圏生物系科目	◆ 水生生物学Ⅰ	2	2	春	○	水生生物学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水圏に生息する生物について、分類、生理・生態、人との関わりについて学ぶ。種に固有の話題、たとえば、種名や学名がどのように名付けられた理由、奇妙な生態、特有の食味や利用方法などについて学習する。特にこの水生生物学Ⅰでは、産業上極めて重要な動物群である、貝類やイカ・タコを含む軟体動物、エビやカニなどの甲殻類を含む節足動物、ウニやナマコを含む棘皮動物を中心に、水圏の無脊椎動物全般について生物学的に理解し、種の特徴を総合的に説明できることを到達目標とする。	◎	○						○
	◆ 水生生物学Ⅱ	2	2	春	○	水生生物学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水圏に生息する生物について、分類、生理・生態、人との関わりについて学ぶ。種に固有の話題、たとえば、種名や学名がどのように名付けられた理由、奇妙な生態、特有の食味や利用方法などについて学習する。特にこの水生生物学Ⅱでは、脊椎動物のうち、サメやエイなどの軟骨魚類やシーラカンス、ウナギ、ニシン、コイ、スズキ、カレイやフグ類などの硬骨魚類、そして、ウミガメやクジラなどの海獣類について、生物学的に理解し、特にアクアビジネスと関係する主要な種類や分類群について、特徴を総合的に説明できることを到達目標とする。	◎	○						○
	◆ 水生生物学Ⅲ	2	2	秋	○	水生生物学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水圏に生息する生物について、分類、生理・生態、人との関わりについて学ぶ。種に固有の話題、例えば、種名や学名がどのように名付けられた理由、奇妙な生態、特有の利用方法などについて学習する。特にこの水生生物学Ⅲでは、プランクトンと海藻を扱う。浮遊生物であるプランクトンは、多様な生物群からなり、動物の浮遊幼生も含まれており、海洋生産を支える生物群として重要であることを理解する。また、海藻については、特にアクアビジネスと関係する主要な種類や分類群について、特徴を総合的に説明できることを到達目標とする。	◎	○						○
	水圏の環境と保全	2	2	春	○	本講義では、海洋環境、特に沿岸域の環境を成立させる自然の仕組みについて、海水の流動や低次生産や有機物の動態等から総合的に解説する。また、沿岸域で起きている深刻な環境問題について紹介し、里海という概念の下、環境を保全・修復するために何をすべきかを理解させる。これらによって、沿岸の環境保全に必要な知識を習得し、個人としてのアクションプランを持つことを目的とする。さらに本講義では、河川や湖沼、ため池など、いわゆる陸水の環境について広く学び、陸水域の物理・化学・生物学的特性などについて理解を深め、水辺の生態系の重要性について認識する。また、水辺ビオトープ、多自然川づくり、水辺の小わさ(生物の視点からの安価で効果的な近自然工法)による理念を理解し、地域において、陸水環境の保全を進め、持続的利用をするために行動することができることを目的とする。	◎	◎	○			○		○
	アクアリウムサイエンスⅠ	2	2	春	○	アクアリウムサイエンスⅠ・Ⅱでは、水圏に生息する生物の採集、繁殖、展示など、水族館や鑑賞魚ビジネスと関連する内容について総合的に学ぶ。このアクアリウムサイエンスⅠでは、小水槽での生物飼育方法や生物の調達方法、水族館の飼育観覧施設、生物の調達や疾病への対策について学習することで、水生生物を小スケールの水槽で継続飼育できるようになることを目的とする。また、水族館の歴史や生物展示方法などを学習して、水族館の設置意義、施設や業務を理解する。	◎		○			○	○	○
	アクアリウムサイエンスⅡ	2	2	春	○	アクアリウムサイエンスⅠ・Ⅱでは、水圏に生息する生物の採集、繁殖、展示など、水族館や鑑賞魚ビジネスと関連する内容について総合的に学ぶ。このアクアリウムサイエンスⅡでは、魚類や水生無脊椎動物を中心とした水生生物のうち、水産増養殖の対象種とはなっていない鑑賞魚や希少種の繁殖や鑑賞魚ビジネスについて学習することを通して、水生生物の研究教育の魅力を理解し、鑑賞魚ビジネスにも必要な実用的な知識を身に付けるとともに、希少種の遺伝子バンクとしても機能している水族館の役割等を説明できることを目指す。	◎	○	○			○	○	○
	フィッシングサイエンスⅠ	2	3	春	○	フィッシングサイエンスⅠ・Ⅱでは、水産生物を捕獲するための手段である「釣り」と「漁業」を扱う。お手軽に行える狩猟である「釣り」は、近年ますます人気が増している。海辺や水辺では、釣りができることが魅力の一つとなっており、ビジネスを生むレジャーの一つである。講義では、初心者でも釣りが始められるように配慮しながら、釣りを本格的に追求したい者にはデータ蓄積の重要性や、釣果を上げるためのヒントとなる事項について解説する。映像を多用し、確実に釣果をあげるベテランや釣り具業界の技術者らが経験に基づき講述し、今後の釣りによるビジネス展開についても考える機会とする。	◎		○			○	○	○
	フィッシングサイエンスⅡ	2	3	秋	○	フィッシングサイエンスⅠ・Ⅱでは、水産生物を捕獲するための手段である「釣り」と「漁業」を扱う。このフィッシングサイエンスⅡでは、漁業を総合的に扱い、関連法規、漁具、漁法、資源管理、沿岸漁場整備、漁港や漁船について学習して理解し、漁業専門用語を身に付けることを目的とする。現在行われている漁業について、法律規則、漁具、漁船の種類や構造の特徴、主要漁業の漁法について、映像をふんだんに使って講述する。また、水産資源の管理や沿岸漁場整備については、地域で実施されている内容を紹介する。また、漁港や漁船についても解説し、未来の漁業の在り方について考察する。	◎	○	○			○	○	○
	水産増養殖Ⅰ	2	2	秋	○	水産増養殖Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水産増養殖について学ぶ。大規模な種苗生産方法から、飼料、育種やバイオテクノロジー、関連施設や事業の事例について学習した後に、種類別に養殖方法を学び、ビジネスの鍵を握る疾病対策を学習する。これらを通して、水産増養殖の全体像を把握し、種類毎の養殖方法について簡潔に説明できる知識を身に付ける。この水産増養殖Ⅰでは、水産増養殖の基本的用語や社会的意義を学び、無脊椎動物であるマガキ、アコヤガイ、アワビ、クルマエビ、ガザミ、ウニやナマコの養殖方法について、説明できることを目標とする。	◎	○	○	△		○		○

授業科目 ◆は必修		単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
水圏生物系科目	水産増養殖Ⅱ	2	3	春	○	水産増養殖Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水産増養殖について学ぶ。大規模な種苗生産方法から、飼料、育種やバイオテクノロジー、関連施設や事業の事例について学習した後に、種類別に養殖方法を学び、ビジネスの鍵を握る疾病対策を学習する。これらを通して、水産増養殖の全体像を把握し、種類毎の養殖方法について簡潔に説明できる知識を身につける。この水産増養殖Ⅱでは、主要な魚類（ウナギ、アユ、サケ・マス類、ブリ・カンパチ、マダイ、ヒラメ、三年トラフグ）の養殖方法と疾病対策について理解することを目標とする。	◎	○	○	△		○		○
	水産増養殖Ⅲ	2	3	秋	○	水産増養殖Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、水産増養殖について学ぶ。大規模な種苗生産方法から、飼料、育種やバイオテクノロジー、関連施設や事業の事例について学習した後に、種類別に養殖方法を学び、ビジネスの鍵を握る疾病対策を学習する。これらを通して、水産増養殖の全体像を把握し、種類毎の養殖方法について簡潔に説明できる知識を身につける。この水産増養殖Ⅲでは、海藻類の過去から未来の利活用について学び、産業的に重要なスジアオリやヒトエグサなどの緑藻、ワカメやコンブやホンダワラ類などの褐藻、黒のりと称されるアマノリ類や海藻サラダの原料となる紅藻の養殖方法について理解することを目標とする。	◎	○	○	△		○		○
	海川の生物とレジャー	2	2	春	○	海と川のレジャーとそれを利用した観光ビジネスについて総合的に学習する。その結果、地域の活性化のために、海や川の特性を活かしたレジャーをビジネスへ結びつける方法について説明でき、それを実現するための生態系サービスの重要性について理解することを授業の目的とする。海や川で子どもたちに伝わる伝統的な遊びを理解し、流木や転石を利用したアートによるビジネス、また、フィールドの特性を活かしたスポーツについて紹介する。また、学習を深めるために、映像を使ってその魅力を伝えようと、事故や漁業者等とのトラブルを未然に防ぐためのポイントについて説明する。	◎	○	○	○	△	○	△	○
	生物統計学	2	2	秋	○	統計学は実験や調査で得られたデータを整理し、解析し、特徴を抜き出すために欠かすことのできない道具である。生物統計学では、基本統計量の算出、仮説検定、回帰分析について、表計算ソフトの関数や分析ツールの援用により、データに応じた適切な方法を選んで結果を解釈できるようにすることを目標とする。	◎	○						
	◆ 水圏生物学実習	1	1	春	○	環境を数値化するための海洋観測、釣獲した魚種の種類検索、プランクトンの採集と種同定、水産動物の発生観察や海藻類の観察、溜池・河川等の生物相調査、関連施設見学を体験することで、水生生物の生物学的な面白さを発見し、海洋や河川環境の特異性を理解する。また、加えて、増養殖の現場に触れることを通して、生物資源と人間の関わり合い方について考察する。これらの実習を通して、専門知識を深化させることへの動機付けを行い、その後の学習を加速させることを目的とする。	◎	○	◎	○				
	◆ 水圏フィールド実習	1	2	春	○	水圏フィールドにおける生物の多様性や生活史を調査するための基礎的な方法を、実際にフィールドにおいて実習し身につける。また、水生生物の生息状況を現場で観察することを通して、水圏生態系の保全の重要性を理解することを目的とする。また、養殖や海洋や河川を利用した観光産業に触れることで、それらが地域の生物や環境に立脚して成立していることを考え、海辺や水辺の地域活性化には、水圏の環境や生物の特異性を活かした活動が有効であることを理解する。	◎	○	◎	○				
学芸員科目	生涯学習概論	2	2	春		生涯学習及び社会教育の本質と意義、学説、法令、行政の施策、社会教育と学校教育・家庭教育の連携、専門的職員の役割、市民の学習活動への支援等、生涯学習論の必須事項を広く理解することを通じて、社会教育の重要施設である博物館の学芸員やその他職員として活躍するための基礎的能力を養うことを目的とする。	△							
	博物館概論	2	2	秋		博物館とはいかなる存在であるかを学ぶ。博物館の歴史を通じて博物館の概念を理解し、博物館法を熟読して基本的認識を深める。とりわけ、博物館の機能について考え、これからの地域、社会との関わりにおいて、その存在意義を明らかにしていく。	△							
	博物館経営論	2	3	春		博物館経営が、諸般の社会情勢によって困難なものとなってきた今こそ、存在意義を明示しつつ社会のニーズを取り入れて、博物館という存在をアピールすることが求められている。経営の安定は博物館本来の目的を達成するにあたって必要不可欠なものであり、適切な組織構築とニーズに合致した経営手法の導入によって経営基盤を整えなければならない。そのためのさまざまな方策や他団体との連携協力などについて考察を行う。		△						
	博物館資料論	2	3	春		博物館資料とは、博物館がその機能を果たす上で必要な「もの」と、それについての情報であり、「もの」は資料化されて初めて展示教育や学術研究に利用することが可能となる。この資料の概念と資料化の過程を学び、活用へとつなぐ。殊に資料化に関する業務や保存・公開についての講義は、実習や作業を交えながら具体的に進めていくこととする。			△					

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8	
学 芸 員 科 目	博物館資料保存論	2	3	秋		文化財の適切な保存環境について、保存化学的な知見に基づく知識を学び、それをもとに温度・湿度を中心とした種々の環境について各種の測定器を使用して実習により、広く環境調技術のスキルを身につける。			△						
	博物館展示論	2	3	秋		博物館が一番に来館者と向かい合う場は「展示」。上手に展示しなければ、展示する意味を減じてしまう。その展示の歴史や展示の諸形態に関する知識や理論、技術等を学び、博物館が有する展示機能について理解を深めると同時に、実際に展示を行う上での基礎的能力を養う。まとめとしては、受講生が実際に博物館での展示をレポートさせて館側の意図を学ぶと同時に、その試みが来館者に伝わり、目的を達成しているか否かといったことについて討論を行う。			△						
	博物館教育論	2	4	春		博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館教育の意義と特性を理解した上で、生涯教育の拠点としての機能の充実を図り、また学校教育などとの連携を行うための能力を養う。あわせて、世代を超えた市民参画の場となるワークショップやボランティア活動の現状と課題について語りあい、参加意識の向上に努めるような授業を行うこととする。		△							
	博物館情報・メディア論	2	4	春		博物館における情報・メディアの現状を把握し、情報の管理・発信についての実践例を学ぶ。併せてデータベースの基本的な構築法を知り、デジタルアーカイブや著作権などといった知的財産に関する問題をふまえた上で、各種メディアを効果的に活用した情報発信のあり方について理解を深める。		△							
	博物館実習	3	4	通年	○	事前指導において学芸員としての心構えの説明を行ったのち、企画テーマに沿った資料収集や取り扱い、展示・調査等の実務実習を行うとともに、多様な館種見学を行い、実際に博物館において行われている展示方法やレイアウトなどを学ぶ。また学芸員として必要な専門知識や技術を身につけるため、博物館の現場で実物資料に即した博物館の活動を体験し、その館園で実際に実現可能な活動を自ら企画・立案する。さらに館園実習の事後指導として、実習を体験しての反省や自己評価等をもとに、これまで行ってきた学内実習での企画テーマにおける資料収集や取り扱い、展示・調査についての課題解決に取り組む。			△	○					
食 品 化 学 系 科 目	◆ 水産食品学	2	2	秋	○	水産食品について、加工原料としての性状、貯蔵方法、各種の加工方法（冷蔵、冷凍、乾燥、くん製、塩蔵、発酵、調味加工）について学び、また、缶詰やレトルト食品、魚肉練り製品については、基本的な製造方法や規格、変敗防止方法などを学習する。さらに加工方法や使用される機器類について学び、また、水産食品に含まれる機能性を理解し、廃棄物の処理や経営についても学び、総合的に理解することで、地域における新しい地域特産物の開発や6次産業化に役立つ知識を身に付けることを目的とする。	◎	○							
	食品化学	2	2	春	○	食品分析法について解説を加えた後、食品の主要成分である、水・タンパク質・糖質・脂質および微量成分について、その科学的特徴を解説し、併せて、主要食品成分の化学変化や成分間相互作用についても解説を加える。この科目は、大学で食品学研究室を担当していた教員が、その経験を活かし、食生活において実践的に役立つ授業を実施する。	◎	○				△			
	栄養化学	2	2	秋	○	糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラルといった栄養素が体内でどのように変化し、働いて体成分と成ったり、エネルギーと成っているかを概説する。そうした代謝過程で何がキーポイントとなっているかを解説する。この科目は、大学で栄養学を担当した経験を持つ教員が、その経験を活かし、食生活現場で実践的に役立つ授業を実施する。	◎	○	△						
	食品機能分析化学	2	3	春	○	食品には多くの成分が含まれ、それぞれが様々な「機能」を有している。食品の「機能」には、一次機能（栄養性）、二次機能（嗜好性・食感）、三次機能（保健機能性）があり、私たちの日常生活に深く関わっている。健康の維持・増進のための食生活は「栄養バランス、栄養所要量、食事摂取基準」を参考にすることができる。本科目では、生体調節機能を有する食品成分の分析方法の原理ならびに実際の方法を理解し修得することを目指す。つまり、特定の食品成分が、分析対象の試料中に含まれているのかどうか、また、その量はどのくらいであるのかについて、化学的な手法で調べる（分析する）手法について学ぶ。関連科目として「化学実験」や「生物学実験」がある。これらの実習科目で得た知識・技術に関連して、各種食品素材からの食品成分の抽出・単離法から、食品成分の定性分析・定量分析に至るまでの各種分析法を解説し、機能性食品での例も示す。	◎	△	○						
	食品加工化学	2	2	秋	○	食品を構成している多様な成分をすべて説明し、そのそれぞれを食べたときにヒトに与えるうま味、苦み、まろ味などのヒトの感覚に対する働きを講述する。そして、美味しさや健康に好ましい機能性を維持したまま、食品を加工する方法を説明する。また、消費者ニーズに合わせた、よりよい加工方法の開発を論じる。	◎				○		△		

授業科目 ◆は必修		単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
食品化学系科目	食品管理化学	2	3	春	○	食品の安全性確保のためにいくつかの法規があり、国内の食品加工と流通・販売に関しては食品衛生法が、農畜水産物の生産と流通に関しては日本農林規格（JAS）がある。また、食品の生産加工法の基準としてHazard Analysis and Critical Control Point（HACCP）があり、食品の流通基準を世界共通に定めたCodex Alimentarius（CODEX）がある。本講義では食品の安全性を守るためのこれらの規則・基準を、過去の事故例や法が定められた経緯などを説明しつつ、事例を挙げてわかりやすく講述する。	○		◎		△			
	食品衛生学	2	2	秋	○	食品衛生とは食品、添加物、器具、および容器包装を対象とする飲食に関する衛生（食品衛生法）であり、食品が健康障害をもたらさないようにするため、非衛生的な事態の発生を防ぐ努力・知恵・工夫である。そこで、食品衛生に関する法整備、食品が健康障害をもたらす原因（食品そのものの変化、食品中の有害物質、有害微生物）、さらに食品包装・衛生管理を解説する。この科目は、大学で食品衛生学を担当した経験を持つ教員が、その経験を活かし、実生活で役立つ授業を実施する。	◎		○			△		
	微生物学	2	2	春	○	ヒトと多様かつ密接な関わりをもつ微生物の基本的概念を理解し、肉眼では見えない微生物への認識を深める。前半では微生物学の基礎（歴史、分類と性状、生理）、病原微生物と免疫などを講述する。後半では、微生物と土壌や水圏環境の関わりに着目し、微生物の環境への適応能力や、環境浄化作用について解説する。また、食に関連した有用微生物、食中毒と有害微生物、バイオテクノロジーの基礎と応用面で微生物の果たす役割などについて、食の安全性に関する最近の話題を加えて紹介する。	◎	○				△		
	醗酵微生物学	2	3	秋	○	微生物研究の歴史、微生物の分類、微生物細胞の構造、微生物の生理と代謝、醗酵の基礎などについて順次講義を進め、無理なく応用微生物学の基礎を学ぶ。	◎	○	△					
	水産物加工学	2	2	春	○	「水産加工品の製造と品質に関する知識を深める」をテーマとして、加工工程に含まれる作業のポイントと目的を科学的見地から理解し、加工技術と品質評価の方法を習得する。	◎	○					△	
	農産物加工学	2	4	秋	○	本講義は主要農作物（米、麦、大豆）を中心として、農産加工の面から多様な品種特性の違いを論ずる。醸造用玄米はデンプン特性など一般食用米品種とは異なる機能が求められる。小麦粉ではパン用、麺用、菓子用でそのタンパク質組成や機能も異なる。そのため同じ作物でも加工用途により異なる特性が求められ、品種や栽培技術の開発が進められてきた。こうした食品としての利用される農産物の構成成分を縦系とし、栽培される品種を横系にその加工適性について概説を行う。	◎		○			△		
	食肉加工学	2	3	春	○	我が国の食肉生産の特徴とその背景、家畜の筋肉が死後の熟成による種々の変化を経て食肉に変換される過程、及び食肉の構造と化学成分の特性に応じて製造される肉製品に関する知識を習得することを到達目標とする。	◎							
	乳製品加工学	2	2	春	○	牛乳の化学成分の理化学的・栄養生理的特性、および機能性を講述する。乳酸菌・ビフィズス菌についての基礎知識を得る。さらに保健機能食品制度の概要および乳製品で特定保健用食品に選定されている科学的根拠について学ぶ。	◎							
	味と食感の科学	2	3	秋	○	本講義では味（五味以外に、最近では「油味」を加えて「六味」とする場合も多い）を、味蕾細胞表面に存在する受容体による味覚感知の仕組みも含め、食品素材による味の違い、食品物性の意味、物性に及ぼす素材など、多方面からの味に関する講義を行い、食品のおいしさを総合的に理解することを目指す。また、味覚・嗅覚の発達・老化、形態を調整し食感を改良した食品、食品産業に関わる香気や臭気について詳細にする。さらに、ここ十年、急速に進展してきた味センサー、匂いセンサーの仕組み、官能評価結果、産業応用例なども紹介する。	○		◎		△			
	◆ 水産食品学実習	1	3	春	○	南あわじ地区は古くから水産業が盛んであり、淡路島の東、南、西にそれぞれ特徴的な漁場を有し、様々な漁獲を行っている。さらに、イカナゴやちりめん、タコ、ウニ等を使った水産物の加工にも力を入れており、恵まれた水産資源を背景とした水産基地としての存在感も高い。このような背景から南あわじ地区には変化に富んだ加工技術の蓄積を見ることが出来る。本講義では、持続可能な水産業とそれを支える加工技術の現状について解説・考察したうえで地域水産加工品の製造を体験する。			◎	○				

授業科目 ◆は必修		単位数	配当 年次	履修期	主要授 業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8
地域創成系科目	地域調査法	2	3	春	○	地域調査に関する十分なスキルを身につけ、不足なく事前準備を整え、適切に現地調査を実施し、得られたデータを最大限に有効活用すべくその整理と分析にあたる。膨大にある既存のデータベースのなかから適切な地域情報にアクセスして分析にあたる。学生がこれら一連のプロセスを自らの計画のもとでおこなえるようになるための授業を提供する。	○	◎						
	地域人口学	2	3	秋	○	2008年、日本の人口は減少を始めた。今後日本はどのような社会に転ずるのか、期待よりも不安の声が多く聞かれる。一方、世界を見渡せば、人口増加によって人々の生存が脅かされつつある地域も存在する。人口の増減は地域の社会文化と密接に関連し、また多様である。本講義では、はじめに人口現象を正しく理解するために、出生、死亡、人口構造などの人口指標を学ぶ。次に、人口に関する理論を習得し、事例を通して人口と社会との関連および地域的な多様性、今日の人口問題を理解する。						○		
	地域保健学	2	3	秋	○	2000年9月に採択された国連ミレニアム宣言において、21世紀の国際的な開発目標としてミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）が掲げられた。本講義では、ミレニアム開発目標を達成するための国際保健学の役割及び国際保健学に関する基礎知識を習得する。						○		
	地域社会学	2	3	春	○	農村部と都市部はともに人々が暮らす地域である。これら双方の違いは産業構造の分布で区分けされることが多いが、それだけで二分されるわけではない。地域で暮らす人間を基準に考えれば、対人関係のありよう、家族・親族関係のありよう、協働と分業のありかたにも違いがある。また、地方自治体の枠組みは平成の大合併を経て人々の生活にいかなる影響を及ぼしているのか。地域社会学の研究蓄積を踏まえて、地域で生きる人間のありようを考える。			○			◎		
	農業開発社会学	2	3	秋	○	本講座の目的は、経済のグローバル化が進む中での日本農業のあり方に関する基本的知識を習得することである。経済グローバル化のプロセスでは、農業は国際摩擦のシンボルとなる傾向が強く、合意形成も難航することがしばしばである。農業という産業的特性とともに、国家間の経済的・政治的・文化的な差異が、そこに集約されやすいからである。そのような環境下で農業を持続的に発展していくために最も重要なことは、世界的な視野の中で、日本農業のあり方を相対化しながら客観的に評価することである。そのためには、日本農業の内部条件（生産構造）とそれを取り巻く外部条件（環境）との関係性を客観的に把握することが不可避である。それによって日本農業にとつてのプラスの環境・マイナスの環境は何か、日本農業の持つ強みと弱みは何かを相対的に把握することができる。本講義では、農業の直接的な発展可能性を規定する外部条件が何か、農業の直接的な内発的発展可能性を与える内部条件が何かを明らかにすることによって、グローバル経済下の日本農業のあり方について考察することにある。					○		△	
	農業・食品業の地域ブランド戦略	2	3	春	○	商標法、地理的表示保護法の基礎を理解するために、平易なレジュメを使用し、具体的な戦略事例を折り込み、わかりやすく説明する。レジュメを予め渡すので、必ず予習・復習すること。あわせて、国家試験「知的財産管理技能検定（3級）」の問題を取り入れ実践的トレーニングを行う。					○			
	食と農のデザイン論	2	3	秋	○	「食と農」は幅広い分野を包含する複合的な学問領域である。本講座では、デザイン（ビジネスモデル）に落とし込んでいくことを目的とするため、農業、流通、消費、環境共生、マーケティング、情報社会などについて基礎的な理解を深めたのち、様々な具体例から食と農のデザインを学ぶことにより、知識としてではなく課題解決の手段として活用できる能力を高める。1次産業の担い手を目指す学生向けではあるが、食産業や地域にかかわる産業への道を目指す人を想定しており、その自覚と意欲をより高めるため、適宜ディスカッションを行い、受講者の意見の発言を求める。						○		
	山・里・海の連携学	2	3	春	○	地域資源の源である山、里、海の生態系としての構造と機能について基礎的な理解を深めるとともに、それぞれの連関や人間活動との関わりについての仕組みを考察する。また、現在みられる里山や里海の歴史の変遷を人間の生業の変化や気候風土との関連として学び、地域で起こる問題を広い時間的・空間的な視野で考えなければならないことを主体的に考えるために、具体的に地域が抱える問題を題材にしてグループ討論も逐次取り入れた授業を行う。			○					
	森林生態管理学	2	2	秋	○	本講義では、森林生態系についての基礎知識を身につけ、森林をとりまく諸問題について理解する。前半は森林生態系についての基礎知識を教授し、後半は、具体的な問題事例について解説したのち、グループディスカッションを行う。保全生態学分野の専門教員が担当する。					○			
	ランドスケープデザイン学	2	3	秋	○	空間のレベルを花壇、ガーデン、庭園、公園、都市計画に分け、それぞれに関連する植物材料とその配置、自然環境の影響、産業構造、人間活動について理解を深める。植物を活用した快適な空間デザイン能力が身につくように討論を交えた授業を行う。	○						△	

授業科目 ◆は必修		単位数	配当年次	履修期	主要授業科目	到達目標（授業内容を含めわかりやすく記入）	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8	
地域創成系科目	ソーシャルファーム論	2	4	春	○	第1部では、ソーシャルファームの役割や可能性などについて考える。第2部では、ソーシャルファームが世界に広がっていることを理解し、またフランスやイタリアなどのいくつかの事例を紹介する。これによって、このソーシャルファームを広い視野で理解するようにする。続く第3部では、日本におけるいくつかのソーシャルファームの事例をみていく。これを通して、さまざまな社会的課題に合った解決方法が工夫され、支援と収益が可能となる事業が、どのように創り出されているのかを考える。					○			△	
	地域マネジメント論	2	4	春	○	地域マネジメント論の中核的要素を、教科書や文献、新聞記事を通して学ぶ。また、実際にフィールドに出た経験や、各地域で見られる成功例を基にグループ討論やグループ発表を行い、実社会で役に立つ提案能力や問題解決能力を授業の中で養っていく。					○	○		△	
専門応用科目	インターンシップ	2	3	春	○	就職希望業界、企業を具体的に想定し、自分にとっての優先事項を理解し、自分のセールスポイントをイメージして、企業に赴き職場を体験する。しかる後、更に学習する必要のある事項を整理して、今後の就職活動に繋げてゆく。			○	◎		○	○		
	◆ 海洋水産生物学演習Ⅰ	2	3	春	○	水産業における現状や将来性などを題材に、文献読解やグループミーティングなどを行い、ディスカッション能力、さらにはプレゼンテーション能力、情報収集・整理能力の向上を図る。		○	○			◎	○	○	
	◆ 海洋水産生物学演習Ⅱ	2	3	秋	○	淡路島における水産業の現状について、実際に施設見学や事業者への聞き取り調査をおこない、演習Ⅰで文献調査した内容と比較しながら淡路島独自の問題点や課題を見つけ出す。		○	○			◎	○	○	
	◆ 海洋水産生物学演習Ⅲ	2	4	春	○	「課題研究の推進」をテーマとして、研究を遂行するとともに、課題研究レポートを書き上げるだけの基礎能力を身につける。		○	○			◎	○	○	
	◆ 海洋水産生物学演習Ⅳ	2	4	秋	○	「課題研究レポートの作成」をテーマとして、自分自身で考え、研究を遂行し、レポートをまとめ上げる。		○	○			◎	○	○	
	課題研究	10	4	通年	○	学生の学んできた専門領域に関する課題研究の成果を論文に取りまとめる。その過程で、論文の構成や考察、文章執筆についての能力を培い、卒業後にそれぞれの職場で各種報告書の作成が容易に行えるようにする。		○	○	○		◎	○	○	
							◎	36	2	8	1	1	10	0	1
							○	6	32	23	13	8	18	14	20
							△	2	5	9	3	3	6	4	5
							合計	44	39	40	17	12	34	18	26